

## ロビン・フッドの死

1 「何も飲まんし 何も食わん」とロビン・フッド  
「肉など食っても良くはならん  
陽気なカークリーの修道院で  
この身体からだから血を抜かぬことにはな」

2 「それはなりませぬ」とウィル・スカーレット  
「お頭おかしら どうぞお聞きください  
あなた様の素晴らしき五十人の射手も連れず  
お一人で行かれるなどは

3 「そこに控えたる屈強のヨーマンは  
きつとあなた様とひと悶着起こしましょう  
もし我らが必要と思し召すならば  
我らはいつもあなた様の意のまままでござる」

4 「ウィリアム・スカーレットよ たわけたことを  
おまえはここに居おるがいい」  
「お頭おかしら そのようにご立腹なされては  
もはやこの願い お聞きいれくださらぬか」

5 「このわしと共に行くのは  
このわしと馬を並べるのは  
このわしの弓を担ぐのは  
リトル・ジョンをおいて他にない」

6 「ご自分で担がれませ あなた様がご自分で  
道中二人で腕だめしなどいかがです」  
「そつしよう」とロビン・フッドは言いました  
「行くぞジョン 万事なるようになるわ」

7 こうして勇敢な男たちは出かけてゆきました  
日がな一日馬を並べ  
黒い川までやってくる  
板が一枚渡してありました

8 板の上には老婆が一人座っていました  
老婆はロビンに呪いの言葉をはきました  
「なぜそのようにこのロビン・フッドを呪う」

9

「ロビン・フッド様をお助けするため  
そのお身体からだを思おもって涙を流ながしております  
今日そのお身体からだから血が流れましよう」

10

「あの女修道院長はわしの従姉妹いとこにあたる者  
わしの近しい親族だ  
その女がわしに害をなすはずもない  
誓ちかってそのようなことはありえない」

11

こうして二人は馬を進めました  
一度も立ち止まることなしに  
カークリーの修道院までやってくる  
中へと入いってゆきました

12

カークリーの修道院へやってくると  
二人は門を叩たたきました  
女修道院長が立ち上がり  
快男児ロビンを中へ迎え入れました

13

ロビンは女修道院長に  
金貨を二十ポンド渡わたしました  
「好きなだけ使うがいい  
足りなければいくらでもやろう」

14

女修道院長が  
ロビンの部屋に降りてきました  
両の手には  
絹きぬに包つつんだ瀉血針しゃけつしんを持っていました

15

「もみ殻もみくさを入れる大皿おおいを火にかけてください  
そして腕うでをまくってください」と女修道院長  
ああ ロビンはなんとつかつな男  
忠告ちうこに耳みみを貸かさなかつたばかりに

16

女修道院長は瀉血針しゃけつしんをロビンの血管けっかんに当てました  
ああ かえすがえすも哀あはれかな

そうして刃針を突き立てました  
腕から真っ赤な血がほとばしりました

17 はじめに濃い血が流れてでて  
ついには薄い血になりました  
ここにきてロビンはやっと  
女の悪意に気がつきました

18 「どうなされたそのお顔色」とリトル・ジョン  
「ジョンよ 一杯くわされた  
・  
・  
・  
・  
・  
・

19 「わしの緑の上衣は  
膝のところまで切られたが  
この手に持ったこの剣が  
お礼におまえの命をいただきます」

20 しかし窓から  
ロビンがすべり降りようとしたその時に  
レッド・ロジャーのよく研がれた剣が  
ロビンの白い脇腹を貫きました

21 ロビンもさっと身構えて  
相手の勢いを巧みにかわし  
レッド・ロジャーの頭と両肩の真ん中に  
ひどい傷を負わせたのでした

22 「いつまでもそこに倒れておれ  
犬がその骸を貪り食うように  
こちらも聖別の浄めを受けるとするか  
行ってお願ひするでしょう」

23 「さあ お迎えだ」ロビンはジョンに言いました  
「お前のその手で送ってくれ  
天国におわす神にかけて  
きつとキリスト様がお救いくださるだろう」

24 「お頭 お許可を

お頭 どうかお許可を  
この館に火を放ち  
カークリーの修道院を焼き払うことを」

25 「いや それは相成らん」とロビン・フッド  
「それはあってはならんこと  
最期に女に手をかけたとあっては  
神に顔向けできはすまい

26 「わしをお前の背に負って  
むこうの通りまで連れてゆき  
小石と砂とで  
美しい墓を作ってくれ

27 「頭のところにはわしの輝く剣を立て  
足下にはわしの矢を立てて  
脇にはイチイの弓を横たえて  
さお尺を・・・」

(宮原牧子訳)